



“えんそくに しゅっぽつ”  
4歳男 福岡県

# 幼年美術

593

2018 4・5月合併号

発行所 大阪府東大阪市長田中4丁目6-3  
ペンてる(株)大阪支店内

全国幼年美術の会 〒577-0013 ☎(06)6747-1601

発行人 廣富靖海

年間購読料 3,000円 1部300円(送料込み)

## 第48回世界児童画展 作品より



“虹の下に飛行機、新幹線が走るよ”  
小1年男 茨城県



“お外で遊ぼう”  
6歳女 アメリカ

前回式期（3歳頃）の子供たちは、内なる生命力が湧き出すように線や形を生み出しますが、図式期（4歳半～7、8歳頃）を迎えると概念化が進み、表現意欲が衰退することもあります。そこでは、岡本夏木（2005）が述べるように、「人間に豊かな発達とは、一方では概念化を進めながら、なおかつイメージの柔軟さと表現性をも發揮し続けてゆくような個性の形成にある」ことに留意したいものです。

上記を実現するための、この時期における絵画指導の重要な点を挙げてみましょう。前図式期においては、①造形遊び（作品になると限らない形、色、材料と格闘することそのものを大切にした遊び）の十分な保障。②その中で生み出される形や色のよさを具体的に拾い上げ、価値づけ、言葉にして子供たちと喜び合うこと。図式期では加えて、③豊かな生活経験をすればそれだけで子供たちがいい絵を描くわけではないという認識。④「描きたくて仕方ない」と子供が思える導入や展開の工夫。⑤絵とは出来事の再現ではなく、まして目に映ったものを写し取ることではなく、世界をどう捉えたかを自分のフィルターを通して「表現」「作業」ではなくして「表現」（作業）することで理解。⑥子供が気持ちよく表現できる画材、技法に関する知識と環境設定への配慮。⑦子供の表現に対し、先生が自らの感性を働かせて反応、受容、共感、賞賛し、意味や魅力を拡大させていくこと。

2018年度も、子供たちの個性溢れる表現が全国でほとばしりますように。

全国幼年美術の会 監事 松岡宏明

巻頭言  
**前回式期、図式期の絵画指導**

「絵から子どもたちの声を聞く」というテーマで世界児童画展の特選の絵を見て、話して、話し合いました。



平成30年3月3日、委員会と会員参加による実技研修を行いました。

### 《委員会》

この会が平成30年に50周年を迎えるに当たり、記念大会を開催する概要を検討しました。

☆午前→実技研修  
(バス等・絵具・版画・製作)

秋田喜代美先生  
(東京大学大学院教育学研究科教授)  
佐川早季子先生  
(奈良教育大学教育学部准教授)

## 和歌山幼年美術の会 活動報告

和歌山幼年美術の会

藤原美穂

### 《実技研修》

参加者 158名

大塚義孝先生による  
「クレヨン・バス・コンテの可能性」

- ◎クレヨンとバスの違い  
実技①長いポリ袋を使って
- 実技②クレヨンでおさんぽ
- 実技③私とお魚



### 「クレヨン・バス・コンテの可能性」

ぺんてる株式会社  
公益財団法人美育協会教育普及担当  
大塚義孝先生



一斉に膨らますと可愛いポリ袋の花が咲いた。

### 《長いポリ袋を使って》

- ①クレヨンで袋に絵を描く。
- ②網の上に袋を置いてこする。
- ③袋の中にお花紙を入れたりシールを貼る。
- ④裏返すと手が汚れない。
- ⑤ストローで吹くと空気が入りやすい。





- ① 1色のクレヨンを持ち、机の上に敷いた大きなボリに一筆書きの線を書く。
- ② 交差しないで、全体のデザインを考えながら、空間がないように書く。
- ③ 合わせることにより線の重なりの面白さが表れる。各グループで考え、発表する。



じゅうたん、綱引き、りぼん、ショール、ベールなど。  
「うれしいひなまつり」の歌も合唱された。





- 『私とお魚』
- ①白い画用紙に白いクレヨンで魚を描く。
  - ②1色のコンテを造形網で削り、画用紙の上にたくさんの粉を落とす。
  - ③魔法をかける。
  - ④紙をゆすると魚が浮かび上がってくる。



魚の絵が見えてくると会場から「わあ一凄い！」と歓声が上がった。



2時間30分の研修でしたが、あつ  
とく間に楽しく終わることができ  
ました。

先日、ある幼稚園の園長先生とお話しを  
して、いた折に、こんなことを仰っていました。「写真を撮られる時、何故指を2本立  
て所謂ピースサインをするの？」と園の  
先生方に聞いてみた。「ピースすると、そ  
れで君が可愛くなるの？」写真映えする  
の？」と色々聞いても、皆、キヨトとして  
納得いく答えがない。要は、何となく皆が  
そうしているから、今までそうしてきたか  
ら、といったところだったそうです。園長  
先生が仰りたかったことは、日常の保育そ  
のものが、すべからくそうしたことになつ  
ていませんか？という事です。これは、大  
変厳しいようで、極めて大切な指摘である  
と思いました。

保育における表現活動は何かに特化され  
たものではなく、幅広く展開されるもので  
すが、敢えて「絵画」だけに絞ってみて  
も、先の園長先生のお話のように、何故そ  
の活動が必要なのか？どういう意味があ  
るのか？といった視点をおざなりしたま  
ま、何となくしていませんか？という大  
きな課題が浮上してきます。そういう意味  
からも、本号巻頭言の松岡先生の示される  
ところに照らして、活動を見直してみると  
が肝要に思います。その松岡先生が日本  
美術教育・美術科教育・大学美術教育の3  
学会合同企画で、今春発刊の『美術教育ハ  
ンドブック』(三元社)の第18章「児童教  
育と造形教育」を担当執筆されていま  
す。あわせて、購読いただき、何ど  
なる活動や、誤ったこ  
とも理解に基づく活動を見直していきたいものです。

又、その見直しをする資質向上の基礎基  
本として、研修会というものが需要で、本  
号では、和歌山幼美の地道に積み重ねてこ  
られた研修の一端をご紹介いただいていま  
す。研修も研修の為の研修ではなく、常に  
何故？との疑問を持つ柔らかく頭に  
なる研修に心がけていきたいのです。

(羽溪)



あ  
と  
が  
き